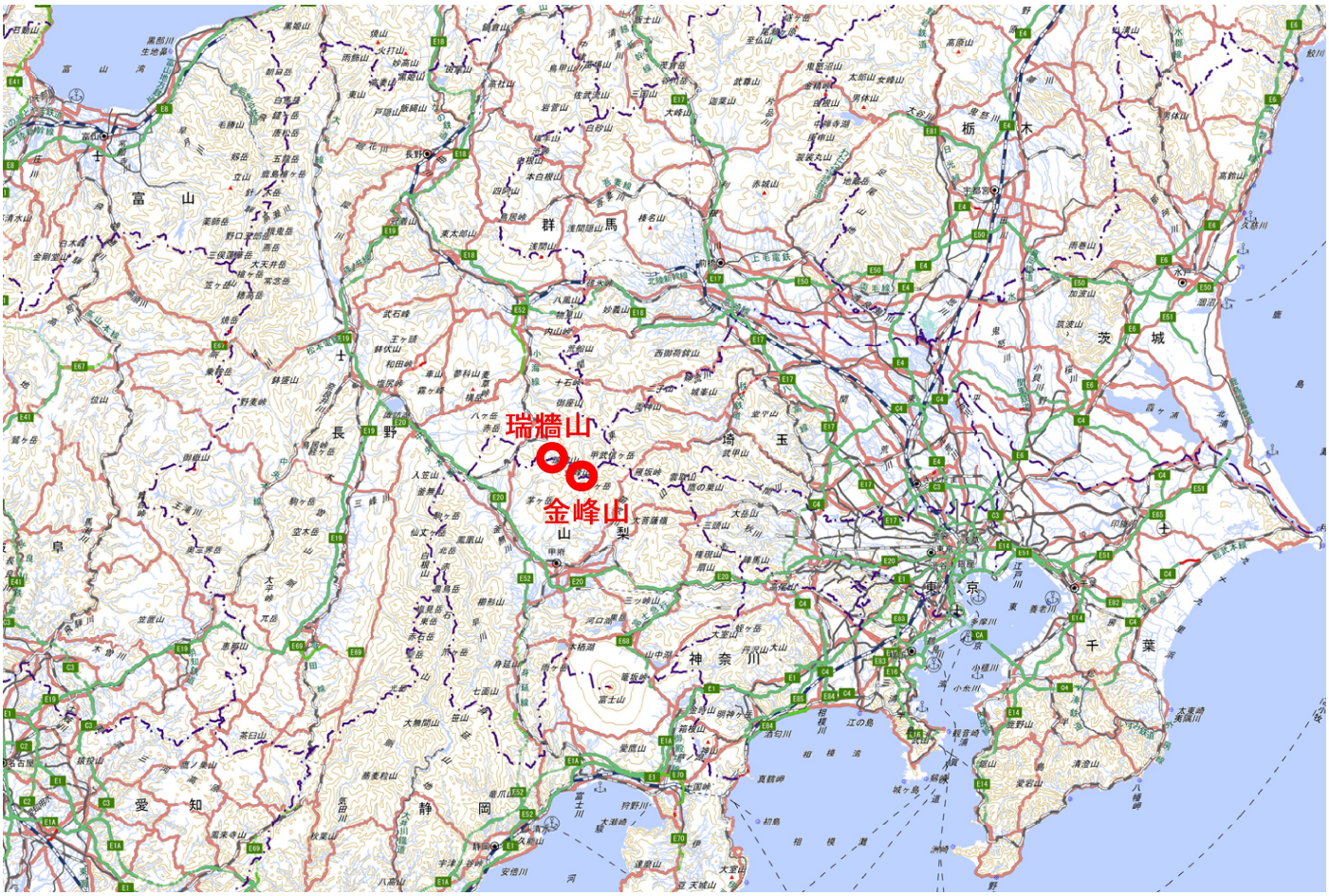
日本百名山
登山日記

歩みを止めなければ、いずれ頂に辿り着く、そんな山日記です

vol.20　瑞牆山（日本百名山 22/100），金峰山（日本百名山 23/100）

瑞牆山（みずがきさん）および金峰山（きんぷさん）は奥秩父西端を代表する山であり、両峰の距離が近い事から縦走すれば１日で２峰の日本百名山に登れるというコストパフォーマンスの高い山です。瑞牆山は標高 2,230mで花崗岩からなり、山口県の山で言うと右田ヶ岳をスケールアップさせたような山で、見どころも非常に多く眺望も良い事から人気の山となっています。
また金峰山も同じく花崗岩の山で標高は2,599m、奥秩父山塊の主脈に位置しています。奥秩父最高峰ではありませんが、その品格から奥秩父の盟主的な存在と言えます。



出典：ヤマップ地図

日本百名山の著書である深田久弥氏も、金峰山についてはこのように述べています。「われわれ山岳党の大先輩木暮理太郎氏に次のような言葉がある。『金峰山は実に立派な山だ。独り秩父山脈の中に嶄然頭角を抜いているばかりでなく、日本の中でも第二流を下る山ではない。世に男の中の男を讃えて裸百貫という諺があるが、金峰山を何処に放り出しても百貫の貫録を具えた山の中の山である。』金峰山に対してこれ以上の賛辞はあるまい。私もそれに賛同する。秩父の最高点はこれより僅か数米

高い奥千条岳に譲るにしても、その山容の秀麗高雅な点では、やはり秩父山群の王者である。」と。
また、瑞牆山については、以下のように述べています。
「昔の人は山の名をつけるのに、今の山岳団体が会誌の名前を考えるように凝らなかった。抽象から遠く、ごく現実的な名をつけた。山の形や色や地勢から推して、槍だの赤岳だの大崩だの。それからまた卑近な身廻りの道具の名を取って、笊だの鞍だの屏風だの、とつけた。だから今、美しい文学的な山の名があれば、それはたいてい後世の宛字と見ていい。（中略）瑞牆山も、昔の人はこんな凝った名前はつけない。大たい民衆はこんな難しい字さえ知らないだろう。私は気をつけて甲州の古地図や記録を見ているが、いまだに瑞牆という文字に出くわさない。（中略）瑞牆山を麓の村では以前、瘤岩と呼んでいたそうである。（中略）旧記によると、金峰を玉墨（たまがき）とした古図があるそうで、小尾・比志の里人は金峰山のふもとを指して瑞墨（みずがき）と呼んだという。瑞牆の名はそこから来たのかもしれない。由来はどうあれ、瑞牆という名は私は大へん好きである。そしてこの名はこの山にふさわしいと思う。」　【深田久弥 日本百名山　原文のまま】
私は、この本に出会ったおかげで山に登る楽しさが倍増したと思っています。山は、古来日本の人々の信仰の対象であり、また四季折々、生活の糧を得る場でもありました。そういった背景から、山それぞれには歴史があり、それを紐解き知っていくことにより同じ山を登るにしても感慨深さが違ってきます。単に頂上をがむしゃらに目指すだけでなく、いにしえの息吹を感じながら歩みを進めることは、自分自身の心を豊かにすると最近つくづく思っています。

さて、先にも記しましたが瑞牆山と金峰山は花崗岩からなる山です。山口県出身の私にとって、花崗岩の山は見慣れた景色であり、過去に登った花崗岩の山はどれも急登で、アスレチック的な四肢を使う場所が多くあり楽しくてたまりません。また、奇岩も多く目を楽しませてくれます。
瑞牆山の存在を初めて知った時、これは絶対に登りに行かなければならないと切に思いました。

右田ヶ岳

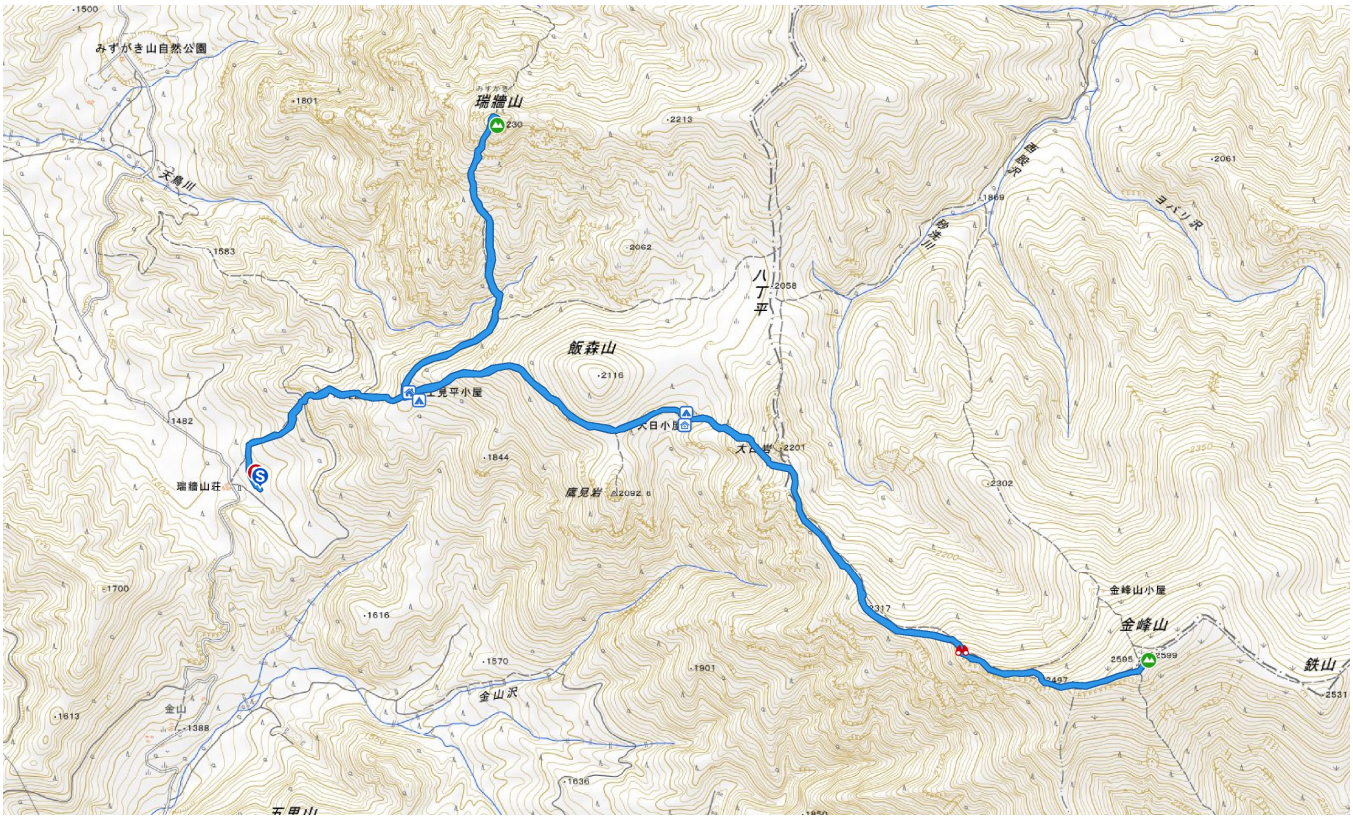
大崩山 像岩のトラバース

右田ヶ岳 勝坂コース

鉾岳 パックン岩

しかしながら、いざ登ってみると私が知っている花崗岩の山とは少し感じが違っていました。これは早朝に降った雨でわかったことなのですが、ここの花崗岩は通常の花崗岩に比べて滑りやすいという事です。山口県で花崗岩の山に登ると、雨上がりでも岩の表面が比較的荒い場合が多くグリップが効きます。この理由の手がかりになるのではと地質を見てみると、金峰山・瑞牆山の花崗岩は新生代新三紀のもので、普段良く目にしている中生代白亜紀のものと時代が異なっていました。
しかしながら、それが要因かと言うと違って、屋久島の愛子岳に登った時、付加体の泥岩で滑りまくった印象が強すぎて記憶に残らなかったのですが屋久島も新生代の花崗岩であり、また宮崎県の大崩山周辺もそうでした。
これらの花崗岩はそれほど滑る印象が無かったので、時代ではなく組成の問題か鉱物の大きさの問題かは地質の専門家ではない私にはわかりませんが、もしかすると単に人が多く登っていて、御影石のように表面がつるつるに磨かれていただけかもしれません。わかる人がいれば是非教えてください。

では、今回の登山について記します。



登山データ：距離 14.2km　累積標高上り 1,797m　登山区分 日帰り （ヤマップのデータを転記）

土曜日の天気が快晴予報であったある日、金曜日に有給休暇を取得し1日目移動、2日目は登山、3日目移動（帰宅）のスケジュールで行ってきました。
自宅を朝6時に出発し、山陽自動車道、名新自動車道、中央自動車道を経て八ヶ岳PAに到着したのは18時過ぎ、食事と歯磨きを済ませ19時半には就寝（車中泊）しました。
翌日は、起床予定時刻よりかなり早い午前1時に目が覚めてしまい、もう少し寝るかどうか少し悩みましたが、登山口で仮眠すれば良いだろうと思い登山服に着替え出発します。

瑞牆山荘登山口駐車場までは八ヶ岳PAから約1時間、途中、コンビニに寄り朝ご飯と昼ご飯を購入、久々にオールナイトニッポンを聞きながら登山口を目指します。
登山口までの道は良く、迷う事も運転に神経を尖らせるような場所もありません。登山口に到着すると30台以上の車が駐車しており、さすが人気の日本百名山と思いましたが、一部は前日からの小屋泊かテント泊の人のようでした。
駐車場はかなり広く、まだまだ余裕は十分であり、私も開いているスペースに車を止め夜が明けるまで仮眠を試みます。しかしながら、次々に駐車場に入ってくる車のライトやエンジン音、そして3時前からいきなりの土砂降りで雨の音で寝ることが出来ず、結局、雨が上がってすぐに準備をし、まだ夜が明けきらない4時12分、ヘッドランプを頼りに一番手でスタートしました。
登山者が多い山域であることから熊への心配はほぼ無いものの、真っ暗闇の中のソロ登山はやはり気を張ります。毎回のことながら、このなんとも言えない緊張感が好きで登山をやってるのかもと最近思うようになってきました。

登山開始時の駐車場
（下山時はこの真ん中にも車が並び、また道路にも路駐の列が伸びる）

まだまだ薄暗い中、スタートします

今回のコースは、富士見平小屋を経由し、まずは瑞牆山に登頂、富士見平小屋まで一旦戻り、そこから金峰山に向かい登山口までピストンします。
距離は14.0kmちょっととお手軽ですが、累積標高が約1,800mとまずまずあります。累積標高が稼げるのは花崗岩の山の特徴でもあり、ダラダラ感が無いので嫌いではないです。
標準コースタイムは約11時間半（休憩含まず）、遅くとも16時には下山できる予定です。
さて、スタートして40分弱、徐々に明るくなりつつある樹林帯の中を気持ち良く歩き、最初の分岐である富士見平小屋に到着しました。
この山小屋は、カレーやうどんなど食事もでき、かき氷もあるらしいですが、まだ宿泊者のみの対応で一般に対しては営業時間前です。すぐ側にはテント場があり、数張のテントが並んでいました。
ここから瑞牆山山頂までは、距離約1.7kmと短いのですが、沢を越えるため一旦、標高で120m下り、そこから標高差540mを上ります。
沢に到着してからの上りは見所沢山で、目を楽しませてくれる奇岩や楽しい岩登り、迷路のように巨岩の間を縫って歩くなど飽きることがありません。

富士見平小屋

小屋の横のテント場

巨岩が真っ二つです

花崗岩がゴロゴロです

巨岩の間を抜けたり登ったりして進みます

花崗岩の山らしい風景です

小屋から約1時間、瑞牆山山頂に到着しました。山頂には予想通り誰もおらず貸し切り状態、しかも風はやや強いものの快晴で目の前に八ヶ岳、南アルプス、また富士山もはっきりと見え大満足です。
また、これから登る金峰山の稜線の先に五丈岩がはっきりと確認できます。
しばし、瑞牆山山頂で写真を撮りながら約30分、一人の時間を過ごした後、次の金峰山に向かい下山を開始します。
花崗岩の山は、上りはアスレチック的で楽しいですが、特にこの山の下りは歩きにくく、思ったよりもペースが上がりません。また、下山の半分を過ぎた頃からはすれ違う登山者も増え、登山道も狭いため道を譲ることも多く（登山は原則上りが優先）のんびりペースとなってしまいます。

瑞牆山の山頂標柱

富士山と左はこれから向かう金峰山

八ヶ岳の山頂付近は雲の中

山頂は高度感があります

一旦沢まで下り、そこから上り返して富士見平小屋に戻ってきました。ここでちょっとだけ休憩です。軽く小腹を満たし、ザックから新しく飲み物を取り出します。想定外に気温が高く、水分補給をマメにしなければならないほど、暑さで消耗気味でした。実は、登山した時は6月なのに関東では連日猛暑日が続いていた時で、下山時の駐車場（標高1,550m）の外気温は30度以上、登山中も標高2,500m以上で暑いと感じるような日でした。

飲み物は3リットルほど携行していましたし、最悪無くなれば山頂付近の山小屋やこの富士見平小屋で購入することが出来るのであまり気にしていませんでしたが、ペースコントロールを誤れば疲労度は指数関数的に上昇する事は容易に想定できるので、ここからは脈拍でペースを管理しながら確実に登っていくこととします。

恥ずかしい話ですが、毎年初夏頃、暑さに身体が慣れていない時期に低山登山して軽い熱中症になってしまいます。

この登山の前の週も地元の低山に登りましたが、暑さで身体が動かなくなり計画を途中で断念し、エスケープルートから下山しました。ちなみに、その前の週の登山は2,600mの残雪登山でしたので、気温があまりにも違い過ぎました。

正直、若い頃から暑さには強くなく、登山でも気温が20度（湿度や風の状況にもよる）を超えるとパフォーマンスが下がってしまいます。

さて、話は金峰山への登山に戻りますが、富士見平小屋から山頂までは距離4.2km、累積標高845mとなります。数字だけ見れば大したことはないですが、意外と平坦な場所が多かったため、登りになると勾配はきつくなります。
風が通り抜けない湿度のあるうっそうとした樹林帯を歩き、砂払ノ頭で尾根に出ると絶景が広がりました。目の前には金峰山山頂に続く美しい稜線、そして富士山、振り返れば瑞牆山が見えます。ただ、この稜線は上りは風が吹いて心地よかったのですが、下山時は無風となり紫外線が差すように痛くとにかく辛い、すれ違う上ってくる登山者の顔は一様に暑さで疲弊していました。

湿度の高い樹林帯歩き

結構な勾配で汗が噴き出してきます

砂払ノ頭から瑞牆山を見る

ここからは稜線の岩場歩きとなります

五丈岩が見えてきました（左上の岩）

石が大きく、地味に歩きにくい

10時30分前、山頂直下の五丈岩に到着するとあまりの人の多さにびっくりです。普段、登山をされないような格好の方、小学生低学年くらいの子供やお年寄りまで、各々にくつろいでいます。
実はロープウエイがあるとかのオチではなく、金峰山には私が登ってきたルート以外に、反対方向から登ってくる大弛峠ルートがあります。
大弛峠は車が上がる峠の中で日本最高の標高(2,365m)があり、金峰山山頂までのルートとしては最も標高差が小さく（単純標高差は230m程度）、簡単に登頂が可能です。
標高2,500m以上の高所登山を誰でも手軽に楽しめ、また絶景を満喫できるとあって、非常に人気が高いようです。

金峰山 山頂標柱

五丈岩と奥は南アルプス

歩いてきた美しい稜線

瑞牆山と八ヶ岳

さて、金峰山山頂で写真を撮った後は、少し離れた場所で早めの昼食でエネルギー補給をします。
当然、水分も多めに摂取し、熱中症対策をします。
約20分の休憩後、名残惜しいですが、暑いので逃げるように山頂を後にします。
下山時は標高が下がるにつれ、どんどん暑さによる不快感が増していきます。ただ、飲料水は十分に足りたのでそこは良かったと思います。
13時50分、無事に駐車場に到着、ほっとしたのもつかの間、予想通り車中はサウナ状態、エンジンを始動し冷房で冷えるのを車外で待っていると、大量のアブに襲撃されてしまい、もうたまりません。
高速道路に乗る前に、地元の日帰り温泉で汗を流しましたが、風呂から出るとすぐに汗だく、おまけに車に乗る寸前に夕立で土砂降り、南アルプスには積乱雲がかかり、雷ゴロゴロ。
早い夏の到来を感じた一日となりました。